

## シリーズ 尻屋埼灯台（第5回）～まぼろしの灯台伝説①～

八戸海上保安部

### 【まぼろしの灯台伝説】

これは、怪火を目撃した灯台職員が、当時を振り返った手記を雑誌「燈光（昭和48年（1973年）7月号）」に掲載したものです。今回は、「**幻の灯台仕末記**」より前半部分をご紹介します。

### 幻の灯台仕末記

林 誠一（尻屋埼灯台次席所員）

「あっ？とうとう灯台も化けるようになったか？」何気なく顔を上げた時、遙か彼方に白亜の塔が目に映り、去年の砲爆撃により破壊されたまま荒れ放題となっていた灯台に、ピカリと光る怪しげな光を見た時—私は本心からそう思った。それは私が尻屋埼に在勤していた昭和21年5月23日の夕暮のことです。

去年の7月に戦災を受けてから、郷里で過ごしていたが8月に終戦となったので、10月初めに単身で灯台に帰ったのです。その時、灯台わきの焼け残った兵舎にたった一人で住んでいた灯台長から「最近、村の者が灯台に灯りがつくなどと言って騒いでいるが本当に馬鹿なことを言うものだ」と聞いたが、何と云っても灯台がつくわけがないことを一番よく知っている私達は、一向に信用せず一笑に付していたわけです。ところがうわさの灯りを私が見てしまったのです。

さてその当時の気象状況はどんな具合だったかと申しますと、どんよりと薄黒い雲が低くたれこめて、もやのためか遠くの方はポーッとかすみ、生あたたかい風がふんわりと頬を撫でていました。ここでお寺の鐘が遠くの方からポーンとでも鳴れば、日没までにまだ1時間近くもあって時間的には一寸早いがお化けなど出るにはもってこいの条件だったのです。しかし冷静に考えてみると物事は科学的にしか考えられなかった私はお化けなど信ずるわけには参りません。**怪しい光は燈塔のレンズのある場所より少し低い窓のところから見えていて、その光は雨の夜にランプか裸電球の光を見た時のような後光が見えるのです。**そこで私は怪しい光の正体をすばやく判断した。初めは死んだ父のことを思いながら歩いていたので父の魂かとドッキリしたが光の色具合から魂とか狐や狸の化けたようなそんなものではないようなので「多分太陽の残光がレンズに反射して見えるのだろうと」これに絶対間違いないと思った。

それから光がいつ消えるか判らないので光からジッと目を離さずに歩き続けてとうとう灯台の正門のところまで来てしまったが怪しい光は依然として光っている。そこで私は自分だけが、原因を知っているので平気ですから、知らない人達を驚かしてやろうと思って「おーい灯台が化けたから早く出て見なさい。変な灯りが見えるから」と宿舎にかけこんでそこに居た人達に言った。

当時焼け残った旧海軍の兵舎を宿舎として同居していた4人が私の呼びかけで飛び出してきた。私を含めて5人で燈塔の窓を見たらやはり光が見えます。私だけが見たなら信用されないかも知れないが5人同時に見たのですからもう間違いのない事実です。そうこうするうち周囲は次第に暗くなったが燈火は依然として消えません。夕日がレンズに反射したものと信じていた私もすっかり自信を失ったばかりでなく薄気味悪くさえてきました。そこで念のために岩屋郵便局に電話をかけて、わけを話し燈台の灯りを見てくれるように頼んだ。しかし話を聞いたその局員は「一人で当直しているので恐ろしくて外に出られない」と言って見てくれない。仕方がないので**入口郵便局に電話して燈台の灯りを見てくれるように頼んだ。その局員は、すぐ外に出て見てくれたが「以前に燈台の光が見えた位置より低いところから光が見える」というのです。**こんなに遠くまで見えるくらいだから狐や狸のしわざではあるまい、何か光るものがある筈だから登って調べてみようという人もあったが、懐中電灯がなく手提ランプ一個だけで足場の悪い階段を登るのは危険なので取りやめることになった。

正体不明の光は、何べん出て見ても消えずにいたが午後8時頃には消えていた。光が見えるうちは何となく安心感があつたが消えたとたんに、かえって気味が悪くなり、便所に行くにも一人では行けない人もあつた。